

書評

**Goro Christoph Kimura and Lisa Fairbrother (eds.)  
(2020) *A Language Management Approach to  
Language Problems: Integrating Macro and Micro  
Dimensions*, John Benjamins Publishing Company,  
273 p.**

根本 浩 行

日々の暮らしの中で人々は様々な方法で言語を用いるだけではなく、どのように言語を用いるべきかを考えながら言語に対する行動をとる。この言語に対するメタ言語行為をいくつかの異なる段階に分け、言語訂正プロセスとして分析を可能にしたのが言語管理理論 (Language Management Theory) (Jemudd & Neustupný, 1987; Neustupný, 1985, 1994, 2004) である。提唱された当初は、あくまでも規範(norm)からの逸脱(deviation)に基づく調整プロセスとされていたが、その後逸脱だけではなくある一定の言語現象に起因する言語管理の存在も認められるようになり、規範からの逸脱もしくは言語現象の「留意(noting)」、留意された逸脱または言語現象の「評価(evaluation)」、評価に基づく「調整計画(adjustment design)」、そして「調整の実施(implementation)」を含むプロセス指向の段階型モデルとして定義されるようになった。これらの主要要素以外にも、規範からの仮説上(hypothetical)、想像上(imagined)の逸脱、実施されたストラテジーの事後評価及びプロセスの循環などが加わり、今もなお理論的に進化し続けている。以下、異文化接触と第二言語習得研究を専門とする書評執筆者の立場から本書を解説、批評する。

第13章エピローグでも述べられているように、言語管理研究はNeustupnýの歩んだ足跡によって発展を遂げてきたと言えるであろう。Neustupnýの母国チェコ共和国を始めとする中央ヨーロッパでは、言語管理理論はマクロレベルの言語計画とマイクロ次元とを繋ぐ理論として、主に言語修整(language cultivation)の探究に活用されてきた。

NeustupnýがJemuddと共に言語管理理論を提唱し、本格的に発展させることになったのは、オーストラリア、モナシュ大学日本研究科在籍時の1980年代と90年代であった。この間、Neustupnýは日本語教育、日本語社会言語学、第二言語習得、異文化コミュニケーションなどの多岐にわたる研究分野において言語管理研究を推進し、数多くの研究者の育成に寄与すると

ともに、言語管理理論をマイクロレベルの実証研究に活用する礎を作った。その後、Neustupný が日本に拠点を移したことで、上記分野だけではなく、日本社会における言語問題の解明を試みる様々な研究に当該理論が適用され、日本国内でも広く普及するようになった。当該理論を含む Neustupný の研究理念は日本言語政策学会の設立目的にも反映されている。

本書は、言語管理理論を様々な言語問題を扱う統合的研究枠組みとして捉え、マイクロからマクロまで複雑に絡み合い存在する様々な言語管理の構成要素を一つの連続体として概念化し、これまでマイクロとマクロに二分化されがちであった社会言語学研究や言語政策研究を繋ぎ合わせる新たな理論的示唆を提示している。序章では、まず言語管理理論の概要と有用性が述べられ、言語計画との比較により言語管理の理論的位置づけが明確化されている。特に、個々の言語使用者による談話訂正過程となる「単純管理 (simple management)」と専門家が理論的に管理する「組織管理 (organized management)」をもとに、マイクロとマクロの両極だけではなくその中間領域にも焦点を当て、言語問題に対する社会言語学的アプローチの再構築がなされていることが、本書の学術的特色と言えよう。

続く第1部では、理論的視座から言語問題の管理を説く。第2章では、Jemudd が初期の言語計画の短所を指摘し、言語管理理論の発達は国家、地域から個々へと対象を絞り込み、「誰の」言語問題かに着目するようになったことがきっかけであったと解説している。また、個々の言語使用者と組織双方がどのように主体的に言語問題の解決に介入するかを考察する研究枠組みとして言語管理が発展してきた経緯が述べられている。

第3章では Fan が東アジアの言語学習者及び移民者の言語問題に焦点を当て、言語管理の基盤を成す理論的概念としての接触場面の意義を再考した。そのうえで、昨今、多種多様な文化的、言語的背景を持つ人々が混在する状況下において接触場面が複雑化していることを明らかにし、その現状を考慮した接触場面の再概念化が必要となることを論じている。第4章では Sherman が 1990 年代に起こった急速な社会的、政治的変化を背景にチェコ共和国から中央ヨーロッパの他の地域へと言語管理理論が普及した経緯を説明し、中央ヨーロッパでの言語管理研究の特徴として、言語に関連する不平等とその背後にある力学の調査が中心となっていることを指摘している。

第2部は東アジアの接触場面における言語問題を対象とした実証研究である。第5章の Aikawa の研究では、日本のビジネス場面における日本人雇用者と外国人雇用者を対象にしたケーススタディが用いられ、英語使用場面での異文化インターアクション管理に関する調査が行われた。第6章の Takeda と Aikawa の研究では、英語を媒介とする大学院プログラムで学ぶ外国人留学生を調査し、共通語としての英語、日本語、混合言語の状況における使い分けを分析することで言語選択の管理に影響を及ぼす様々な要因を考察した。どちらの研究もインターア

クシオンと組織管理の関連性を論じ、マクロレベルの政策立案にはマイクロレベルのインターアクションの調査が重要となることを明らかにしている。第7章では、Fairbrother が個々のインターアクションにおける言語管理の交差と分岐を分類し、プロセスのどこで、どのように言語管理が交差、分岐するかを考察することが、今後マイクロ・マクロ次元をより有機的に結び合わせていくための中心的課題となりうることを示唆している。

第3部は中央ヨーロッパを中心とした言語の標準化に関する国家間、国家レベルの言語問題に焦点を当て、収斂と分岐の二つの方向性から組織管理とマイクロレベルの言語管理の関連性を論じている。第8章では Takahashi がフォーマルな場面で実際に使用されるドイツ語を分析対象として、言語の成文化(language codification)に基づきドイツ語標準変種の発音の管理を考察し、言語の成文化・非成文化プロセスモデルを提示した。続く第9章の Dovalil の研究も同じくドイツ語を対象言語とし、標準化と対を成す二つの異なる概念、非標準化(destandardization)と民衆化(demotization)を調査し、これら二つの区分にはマイクロとマクロの相関分析が必要となることを明らかにした。Prošek は第10章にてチェコ語電話相談サービスのカウンセラーとして働く言語学者と一般相談者との間で起こった標準言語の管理を分析し、マクロ次元の組織管理がマイクロレベルのインターアクションに起因することを指摘した。また、本研究では言語管理自体を議論の対象とするメタ管理の存在が明らかにされている。

言語管理行為者としての研究者の役割に重点を置いた第4部では、研究結果や研究方法論、公衆関与(public engagement)を研究者が自ら点検する上でも言語管理理論が有効であることを示し、言語管理研究に新たな洞察を提供している。第11章で Saruhashi は、在日朝鮮人一世へのライフストーリー・インタビューをもとに、マイクロレベルのデータ分析に言語管理理論を適用し、当該理論が研究対象者を総体的に理解する上で役立つだけでなく、インタビュー方法の再考にも繋がることを指摘している。第12章で Kimura は、ドイツとポーランドの国境地帯で行った調査結果に基づき、組織管理としての研究者の活動を言語管理過程サイクルとマイクロ・マクロサイクルに照らし合わせて考察した。そのうえで、研究者は政策立案者と言語使用者を繋ぐ潜在能力を有し、公衆関与によりマイクロからマクロへの橋渡しをするだけでなく、研究の社会的影響を評価することでマクロとマイクロ次元を結びつけることができるという意義深い見解を示している。

さらに、第13章のエピローグで Kimura と Fairbrother は、言語管理理論に内在する認知過程こそが研究枠組みとしての利点であると論じ、その認知過程には含まれない規範の存在と規範からの逸脱を言語管理過程の事前段階として分類している。また、本書の実証研究を通してポスト実施段階での事後評価を明確に位置づけることにより、言語管理が次のインターアクションの事前管理へと繋がる循環プロセスであるという論拠を固めることができたことと述べている。

その一方で、ポスト実施段階がマクロな分析へと繋がる起点として新たな役割を果たしうるという指摘も今後言語政策研究を発展させていく上で重要な意味を持つ。マイクロとマクロは切り離され二極化された概念ではなく、一つの連続体を成す相対的概念であり、ある一定レベルの言語管理を深く考察するためには、他のレベルを考慮することが有益であると編著者は論じている。つまり、マクロ過程の検証にはマイクロを、マイクロ過程の分析にはより広範なマクロ次元を参照することが次元横断的分析の根本原理となると本書は結んでいる。

今後、言語問題の解明を進めていくためには、言語管理理論の出発点である言語に対する行動(behaviour toward language)が、脱文脈化されたものではなく、状況に埋め込まれたコミュニケーション行為を管理するメタ言語行動であることを再確認する必要がある。この状況性を考慮することで、言語管理は様々な外的・内的要因(言語使用環境、アフォーダンス、他者との力関係、言語使用者の属性、自己認識、規範や慣習に関する知識、そしてその実践能力など)のもとに成り立つ社会文化的かつ認知的なプロセスとして位置づけることができる。言語使用活動の認知的側面だけではなく社会文化的側面に焦点を当て、言語に対する行動のより深い要因を調査することによって、序章で言及されている、誰が、どのような場面で、どのような方法で、何のために言語を管理し、どのような結果をもたらすかを効果的に分析することができるようになるであろう。また、言語管理は常に一定とは限らず時間や状況による変化を伴う動的なプロセスとなり、着眼点がマイクロ・マクロ間で状況に応じて変化することからも必然的に社会文化的視座を伴う理論であると考えられる。ゆえに、言語管理理論はマイクロとマクロの差異だけではなく、認知的視座と社会文化的視座の理論的隔たりを埋める潜在的な発展性を秘めており、社会言語学理論や応用言語学理論のさらなる進化に寄与し、言語政策研究の多角的な発展に繋がりうる研究枠組みと言えるであろう。さらに、循環する性質を持つ言語管理は、問題指向型というよりは能力形成型の発見的プロセスであり、事前・事後段階を含めた言語管理過程における葛藤がその後の発達を促進しうることも軽視することはできない。そのため、マイクロ・マクロ間の次元横断調査だけではなく、発達の軌道を調査する縦断研究にも適しており、グローバル化時代の言語現象を紐解く理論として、今後の実証研究へのさらなる適用が期待される。

## 参考文献

Jernudd, H. B. & Neustupný, J. V. (1987). Language Planning: For Whom? In Laforge (Ed.), *Proceedings of the International Colloquium on Language Planning* (pp. 69-84). Quebec: Les Presses de l'Université Laval.

Neustupný, J. V. (1985). Problems in Australian-Japanese contact situations. In J. B. Pride (Ed.), *Cross-Cultural Encounters: Communication and Mis-Communication* (pp. 44-63). Melbourne: River Seine.

Neustupný, J. V. (1994). Problems of English contact discourse and language planning. In T. Kandiah & J. Kwan-Terry (Eds.), *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution* (pp. 50-69). Singapore: Times Academic Press.

Neustupný, J. V. (2004). Theory and practice in language management. *Journal of Asian Pacific Communication* 14(1), 3-31. doi: 10.1075/japc.22.2.09neu

(立命館大学)

根本 浩行